

一五〇年前の有田四山はまごう陵

覚書

其の七

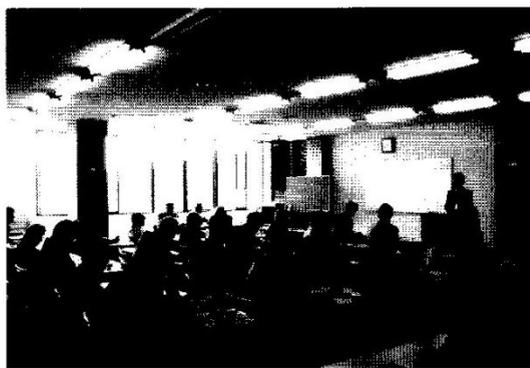
一五〇年前の有田皿山ば歩こう隊覚書

其ノ志

目次

実施までの経緯（申請手続き等）	1
活動内容	2
調査方法、調査結果	4
各隊の調査報告	6
泉山隊	6
中樽・上幸平隊	9
大絵本（大樽・赤絵町・本幸平）隊	11
白川・穉古場隊	16
中の原・岩谷川内隊	23

実施までの経緯 (申請手続き等)



有田町歴史民俗資料館
副理事長中村・クラブ・ガイド・アリタの挨拶

有田町歴史民俗資料館では、平成19年9月、ミュージアム活性化活動の一環として助成を行っている「花王コミュニティミュージアム・プログラム2008」に「陶器市の思い出」エッセー公募事業を内容としたプログラムで応募したが、あえなく落選。その後、21年4月に創立された特定非営利活動法人アリタ・ガイド・クラブ（大橋康・理事長）に「協働でやりましょう」と働きかけ、起死回生を図り、再度、同年5月12日付けで「二五〇年前の有田皿山歩こう隊」活動の申請を行った。

平成21年5月、全国で116団体からの申請がある中で、選考の結果、8月に18団体の助成が決定し、その1つとして選定通知を受けた。今後、活動を活発に行う事ができるとアリタ・ガイド・クラブ（以後「ガイドクラブ」と表記）や有田町歴史民俗資料館関係者は狂喜乱舞。

その後、活動を進めるための詳細内容を詰めるため、有田町歴史民俗資料館で会合を開催した。さらに佐賀県立図書館が所蔵している安政6年（一八五九）の「松浦郡有田郷図」の現図を見実するために佐賀市へ。郷土資料担当の多々良友博さんにデータ化された古地図などを見せていただいた。また、鍋島家の宝物を収蔵展示している徴古館でも同じような古地図と現在地図との比較ができる城下町地図を作製していたので、それらも見学し、学芸員の富田宏次さんに話を伺った。

活動内容



資料（古地図）に見入った事前研修会
（佐賀県立図書館）

平成21年4月16日

ガイドクラブ創立総会

5月7日

ガイドクラブ大橋理事長と有田町歴史民俗資料館館長・尾崎、花土
コミュニティミュージアム・プログラムへの申請について打合せを
行う

5月12日

申請書類発送

8月10日

助成決定通知が届く

9月14日

ガイドクラブと有田町歴史民俗資料館との打合せ会議

9月29日

佐賀県立図書館で安政6年「松浦郡有田郷図」を実見

10月2～3日

花王コミュニティミュージアム・プログラム助成団体報告会（東京）
参加

参加

町内各所に参加者募集チラシ配布、ガイドクラブHP掲示

応募仮締切

10月19日

各隊長決定（五隊）

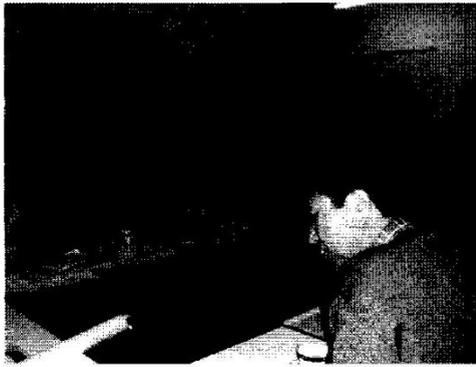
10月16日



隊長会の百出議論

- | | |
|------------|---|
| 10月26日 | 隊長会議開催（資料館にて月1回開催 平成22年9月まで） |
| 11月6日 | 「歩こう隊」発公式開催（有田町生涯学習センター） |
| 12月1日 | 発会式後、各隊ごとに活動開始（平成22年9月まで） |
| 12月15日 | 有田町歴史民俗資料館館報「季刊皿山No.84」で活動紹介 |
| 平成22年1月25日 | NHK佐賀放送局管内での活動放映 |
| 2月22日 | ガイドクラブと資料館打合せ会議 |
| 3月1日 | 有田町歴史民俗資料館館報「季刊皿山No.85」で経過報告① |
| 3月22日 | 各隊集合しての経過報告と今後の活動について（花見も兼ね） |
| 3月24日 | ガイドクラブと資料館打合せ会議 |
| 5月21～22日 | 花王コミュニティミュージアム・プログラム助成団体中間報告会
（土浦）参加 |
| 6月1日 | 有田町歴史民俗資料館館報「季刊皿山No.86」で経過報告② |
| 7月7日 | 帯留会議 |
| 7月27日 | 帯留絵付け作業（練習） |
| 8月10日 | 帯留絵付け作業（本番） |
| 8月下旬～ | 『一五〇年前の有田皿山ば歩こう隊覚書』製本作業 |
| 9月7日 | 『新有田郷図』の仕上げ作業 |
| 9月中旬～ | 『新有田郷図』完成披露発表会（有田町生涯学習センター）
今後、新地図を手に歩く「歩こう会」を実施予定 |

調査方法、調査結果



寒い中でも熱い話し合いをする隊長会

今回の活動の目的は、一五〇年前に描かれた古地図を手に、実際に小路や山道まで歩くことで現在との比較を行い、時間の経過や歴史を体感すること、さらにはその成果として、一目でその違いがわかる「新有田郷図」を作成し、町内外の方々に発信することにあつた。

実際に町内外の方々に新聞紙上や館報、あるいはガイドクラブのHPなどで参加者の募集をかけ活動を始めると、下は小学生から上は80代の老若男女の方々が、様々な思いを抱いて参加された。活動を進める途中でも次第に隊員が増え続け、その方々を5隊（泉山隊、中樽・上幸平隊、大絵本隊、白川・稗古場隊、中原・岩谷川内隊）にグループピングし、それぞれ隊長を選出。各隊平均して10名前後のメンバーで、その構成メンバーの最も都合のいい曜日を選んで活動が開始された。

各月末に隊長会議を開催し、活動の中で不明な点や問題点などを全体の共通認識として持ちながら、各隊で月に1〜3回程の活動を実施した。活動後には資料館で事後検討会を開催し、現在確認できる道筋、川筋、神社・仏閣などを記録していき、最終的に担当する地区の地図の中に一五〇年前と現在の違いを書き込む作業を行っていった。



絵付けのことはまかせて!! (帯留の絵付け作業)



さて、何を描こうか……デザインの検討中
(帯留の絵付け作業)

各隊により、進度にばらつきはあったものの、ある隊では祖母から孫まで一家総出での参加があり、昔の話や出来事などを孫に伝えたいという祖母の思いが確実に活動の中で伝わっていることが確認できた。また、この有田に生まれて70年以上住んでいるのに、近所でありながら初めて訪れた場所があったと驚かれた人、あるいは隊員の活動を見て面白そうだと途中から加わったりと、目的もさることながら調査の過程が町づくり、郷土学習に大きな意味をもつことを実感した。

それぞれの隊で活動を進める中、さらに古老の方に昔の話を聞きたい、あるいは有田焼の歴史の中で多大な功績のあった人物の墓碑を訪ね、荒廃している現状を見兼ねて清掃しようなどという声が自然と上がったり、改めて自分のルーツ、あるいは心の心棒を求めている活動になっていったように感じることができた。

なお、「新有田郷図」は、2枚の地図のうち、上の透明の地図の方が安政6年に描かれた「松浦郡有田郷図」(佐賀県立図書館所蔵)をもとに実際に歩き、一五〇年前の道や川、神社・仏閣など、今も皿山に残る部分を確認したものである。道路などの実線は現在も残る道で、点線は現在残っていない道、あるいは個人や会社などの敷地内にあつて出入りが不可能な場合などを、そのような表記としている。また、色は古地図の色に準じて塗り分けた。

また、2枚目の地図は現在(有田町都市計画平面図No.3・No.4)のものである。この2枚の地図を重ねて見ることで、今は残っていない道や石造物など、現在と、五〇年前の違いが一目でわかるものと思われる。なお、安政の古地図には「有田千軒」と言われた家屋が軒を連ねているが、今回の地図には煩雑さを避けるためにあえて掲載しなかった。

さらに、現在はほとんど姿を消した当時の登り窯は、その跡が確認できるものも多く、当時の姿をしのぶすがに明記した。

各隊の調査報告

〱 泉山隊 〱



泉山から中樽へぬける隠道付近で、松尾隊員より昔のことを聞く

有田焼の原料である陶石を採掘していた泉山磁石場（当時は土場と表記）は、古地図にも道がある。さらに、石場内に武雄領との境近くと南側道路そばに建物があり、現在の石場神社付近にも建物がある。これらは「土場番所」の番人が居住していたものと思われる。

さらに区内の川もほぼ現在と変わらない流れを確認できたが、地図には屋根の形を表したものが随所に点任する。これは陶石を砕く装置である唐臼があった場所を示していると思われる。また、「枳敷窯」跡近くの民家周辺に巡らされている植物が「枳」「ゲズ」と呼ばれるものである。一般的には「カラタチ」または「キコク」「ゲズ」とも言い、別名は「唐橘（カラタチバナ）」。ミカン科の一種で、枝には扁平で大きな刺が付き、触ると痛い。以前は生垣としてよく見られたそうだが、窯の名称にも使用されるほどであるので、以前はこの近辺でよく見受けられた植物だったのではないだろうか。

磁石場の西側、武雄領へと続く道沿いに金毘羅社が山の頂上に現在も残っている。さらにその登り口の小さい社の中に右造物があるが、古地図では登山道の右に「釈迦」、「■神」とあるが現在は左側にあり、移動しているものと思われる。さらに武雄方面への道沿いにある墓地は一番高い位置に泉山の実力者であった百田恒右衛門家の大きな墓地があるが、古地図のこの周



「そがんじゃないか(そうではない)、こがんばい(こうだった)」と歩いて得た結果を書き入れる

辺には墓地はない。

弁財天神社は「弁材」とあって、境内は薄紅色で描かれ、その下に二重、一重の線で囲っている。これがトンバイ塀なのか否かは不明。弁財天社への参道と思われる入口東側に、柵を設けた比較的大きな建物がある。屋根は瓦屋根と思われる、この場所に上の口屋番所があったとされ、この建物がそれに当たると思われる。

年木谷への道は現在とは大きく異なっている。道路沿いに川筋があり、天満宮も現在と同じ位置にある。しかし、途中、道の右側にある墓地は古地図には描かれていない。

さらに谷筋を登ると現在「琵琶岳観音」と呼ばれる建物があり、古地図には「観音」とある。しかし、このあたりの道は防災施設が設置され、かなりの変動がある。山上から流れる川筋には唐臼が点在する。

年木谷から下る途中、右に延びる道は現存し、その先には登り窯が描かれている。これは「年木谷3号」窯跡と一致し、26室を有する大きな窯であった。さらにその近くには石垣を表したと思われる箇所があり、そこは現在溝上家の住宅がある。「皿山代官旧記覚書」には溝上三郎右衛門という大庄屋がいたとあり、恐らくこの石垣を有した建物が大庄屋の住まいではなかったかと推測できる。

また、時代的には多少新しいものになるが、現在のロータリー付近の道路中央に、昭和の初めころにあった宅地内の井戸の跡が今も確認できる。

やっぱり有田が好き

田中萬里

隊で何度か泉山を歩き、改めて有田はすごいと思いました。山に囲まれうなぎの寝床みたいな一本の道筋に人々が延々と暮らす小さな町なのに、四〇〇年ほど前に朝鮮の陶工が泉山で磁



泉山公民館にて、新年会を兼ねてお弁当をいただきながら話し合い

石鉱を発見し、栄枯盛衰は何度も繰り返されたでしょうが、やきもの産業で今日まで生活をしています。

五〇年前の地図は、新しい文化が外国より入る以前の明治より少し前でしたので、道路も狭く鉄道もまだ通ってなく、自然の傾斜を利用した登り窯や唐臼などがまだいたる所に沢山ありました。裏通りの小さな路地は今も昔とほとんど変わっていない様です。祖父母や父たちもその場所できつと遊んでいたのでしょう。歩いて見て思った事は、先祖の方々の伝統を守る知恵と努力と言う財産で、今私たちは暮らしています。だから私たちも、五〇年先、四〇〇年先の未来の人達へ、この伝統と言う財産を残さないといけない気がします。

今有田は大変な時代ですが、やきものの魅力、有田のすばらしさを、大人も子供も、一緒になって「古地図・新地図」を片手に歩いて伝えて行けたらと願っています。

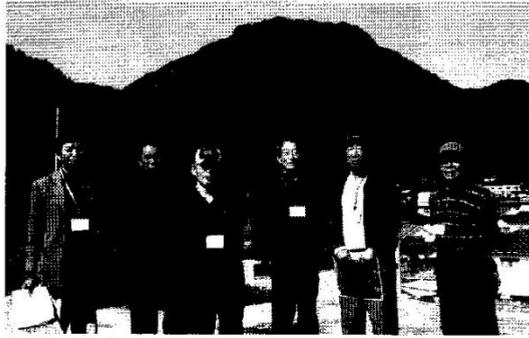
『やっぱり有田が大好き』

【泉山隊参加者】

金武康男（隊長）

鷹巣文子、花田利男、花田陽子、尾崎葉子、松尾悟、田澤貢、中島誠一郎、中島良人、

知北徹、木原信一、田中萬里、馬場正明、藤井陽滋



中樽・上幸平隊員
(上幸平 高見地区から英山を背景に)



富右衛門入口(秀貞入口) 橋の上から
見た唐臼の柱穴跡。及び左上(丸い部分)
中央(角型)

「大正四年八月 青島攻圍軍ガイルチヌ砲台ニ於テ分捕タル独逸海軍砲」

登り窯の近くには山神様(登り窯の神様であろう)があり、現在も確認できる所が多い。中樽・富右衛門窯入り口、東側の岩の上に八幡宮、稻荷神、地神(文化7年銘)、天満宮、山神、猿神などが安置してあり、12年に1回、申年の5月に伝統行事として山王祭が行われる。

安政の絵図には河川にたくさん唐臼の表示(川筋に屋根のみを描いている)があるが、この地区で遺構が残っているのは中樽の秀貞倉庫前の河川合流箇所、唐臼の柱穴が確認できる。

絵図にある中樽窯の中央付近に窯壁の一部が残っており、温座の巢(通煙孔)も確認できる。後世に残しておきたい。また、富右衛門窯裏手の東側谷の所に、明治期に築造されたと思われる登り窯の窯壁が残っており、貴重なものである。上有田駅の東のトンネルのある山の上に、腕木式信号機(シグナル)があった。その故か、この山をシクナイヤマと呼んでいた。

小樽2号窯跡は以前、ホットサン(宝塔堂か)というのがあった。また、上幸平・西光寺裏手に辻九郎が築いた窯といわれる昭和の石炭窯が現存している。

この地区には絵図に記載され現存している建造物がある。ひとつは安政2年築造の辻家の主屋と附属物(門)、嘉永2年築造の徳永家の主屋である。また、石橋は大地堂橋(旧名称 大地蔵橋)が築造年不詳。西光寺橋は大正8年8月築造、黒岩橋(個人所有)は昭和17年に築造されている。

【中樽・上幸平隊参加者】

大串和夫(隊長)

岸川敬、永尾勝敏、中村貞光、吉永登、中添勝芳、中原康、井手邦男、篠原啓一郎、
宮田章一郎、西山美穂子、武富室実、二宮閑治、二宮辰子、本山陶美

各隊の調査報告

大絵本隊



踏査後、資料館にて本日の成果を確認する

八幡社奥の院↓成松碑↓日峯社

古地図では、八幡宮（現在の陶山神社）本殿の東山手高台には奥の院の所在が明記されているが、現在はその痕跡すらない。調査隊の歴史的考察の結果、現在の李参平の顕彰碑の場所にあったと確信する。思うに一九一七年建立のこの顕彰碑は、連華石山（れんげし）で何の所縁もないところに場所を選ぶことは無かつただろう。

李参平碑から大神宮に登る登山道（現在は、草木に覆われ辛うじて歩行できる程の狭い道）を200メートル登った所に成松碑を確認した。

次に日峯社を探すために前進。これより50メートル先は大崩落の後の大きな岩で道をふさがれ、残念ながら前へ進めず断念。引き返し、成松碑と背中合わせのように建っている古い粗末な丸い石像を再度調査するも更なる確証は得られなかった。やっと石柱の一部とみられるものが近くで見つかり、これが日峯社の名残かと推測できる。

※成松信久について

皿山代官所は、正保4年（一六四七）から廢藩置県の明治4年（一八七二）までに二二五年統いていて、その間の、現在確認されている代官は41名ほど。その中で退官後皿山の住民によって生きていた間



覗いているところが、昔の川です

に祀られた代官がただ一人いる。それが成松万兵衛信久である。

信久は文化12年(一八一五)38歳の時、皿山の代官に任じられ、文政8年(一八二五)まで、10年余その任にあつた。そして任満ちて佐賀に帰つた後皿山の住民達がその恩を追慕して建てたのが成松社である。明治23年、有田の有志達が計ってお参りしやすい場所を選び、陶山神社の真公園にその碑を再建した。

(参考文献：松本源次著「焔の里有田の歴史物語」)

商工会議所より三空庵墓地に至る一帯の移り変わり

現在有田商工会議所北側を流れる中樽川も、古地図では商工会議所の裏手で大きく南側に屈折しているが、現在は深川製磁の一部になっているところから真直になっている。古い川筋の名残と思われる水路が、商工会議所入口道路わきに見られる。

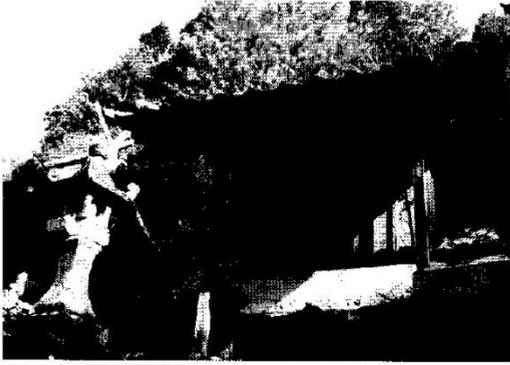
商工会議所付近は、昔の墓地であり、この墓地から現在空き家になっている旧平林邸を通り、三空庵墓地に至る古い道が古地図にあるが、河川の改修のためその道はなくなり、僅かその名残が、川の北側山裾に残っている。

現在は、「平林道」と言われてきた美術館裏の小道が舗装され、川筋にぶつかるまで続いており、前述の三空庵墓地に至る道の痕跡に繋がっている。三空庵墓地内の水路は現在もあり、川に向かつて落ち込むように続いており、上幸平区との境界になっている。

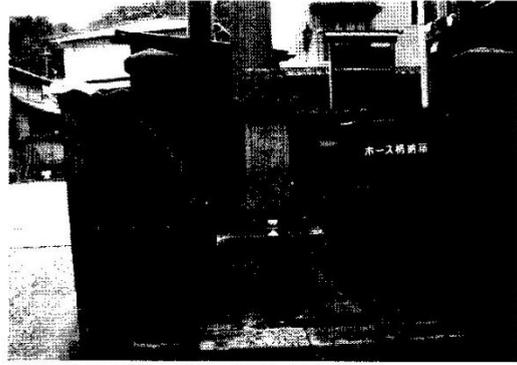
昔の登り窯の間にある「山の神さん」

西登窯と大樽窯の間に「山の神さん」があつた。この「山の神」は、窯火事を出さず、焼き上がりの無事であることを祈って、登り窯の上方に必ず祀つた守護神である。

昭和59年、岩尾磁器が対山窯の新しい社屋を建てる際、この山の神さんを陶山神社本殿南山



陶山神社に移設されている八天社



銘品堂の西側小路にある水神様

手に移設することになったが、山の神の社殿は昭和59年に完成した。

文化3年(一八〇六)から天保年間(一八三〇〜四三)までの15体もの石像を安置してある「山の神社」は、昔から子どもの守り神として大樽区の子ども会が中心になり、夏祭りが行われていたが、昭和59年現在地に移設されてからは、毎年8月3日の陶山神社の夏祭りと同日にお祭りを行っている。子ども向けの素晴らしい景品が当たる福引抽選会は、地元大樽の子ども達のみならず、町内各地からの子ども達にも大変人気のある夏祭りイベントとしてすっかり定着している。

現在、古地図とほぼ同位置にも社があり、岩尾磁器により祀られている。

水汲み場

古地図には記されていないが、現在銘品堂西にある小路の入口左側に大きな水汲み場がある。有田町の上水道が普及するまでは本幸平、白川方面からの利用者が多く、大きいバケツやてんびん棒で持ち帰るほど、賑やかな水汲み場であった。

「安永二癸巳(一七七三)二丁吉祥日」と刻んだ石造りの水神様が設置されており、水量豊富な美味い水で蓮華石山より流れる水である。安政6年より古いものだが、何故古地図に記載がないのかは不明である。

夏になると、名前を書いた西瓜が沢山浮かんでいた懐かしい記憶があり、先人達が築いたこの水汲み場を大事に保存したいものと思っている。

八天社

八天社は白焼窯(しろやき)の守り神として、古地図に記されているが、現在その場所にはなく、現伊万



法元寺裏手の石造物群。十六善神との関わりを求めて、夢中で調査をしたが、今もって不明

甲警察署上有田駐在所の裏あたり（現在は個人宅）と察せられる。現在は、陶山神社の右手に移設され、祀られている。移設の年は不詳なるも、石の鳥居・燈籠には弘化2年（一八四五）と刻してある。八天社は嬉野市塩田町の八天社よりの分霊と思う。

なお、陶山神社の神殿に設置されている焼物の玉垣は、なかなかの優品で、本幸平より弘化3年寄進と記してあり、難しい技である板作りの方法で作られていて、釜焼名と細工人の氏名が染付で記してある。正に有田の宝物であり、大事に保存すべき逸品である。

釜焼名などで判明しているのは以下の通り

焼主深川平左衛門、武田虎之助、清水徳二郎、草場勘治兵衛、原弥十、藤本庄吉、市の瀬■、藤重■、武田■、山本兵吉、江口米吉、原熊七、森源之助、池田武衛門、江口彦次郎、岩尾儀助、緒方儀兵衛、座木豊助、西山貞助、嬉野亀右衛門、武田幾太郎

十六善神について

享保年間（約二八〇年前）の古文書『皿山雀』によると、皿山代官の年間行事に1月の催物として十六善神を祀る記録があり、古地図にも金毘羅神社境内に表示されている。地形的に現在のJR新旧トンネル付近ではないかと思えるが、トンネル工事等により地形が変化していることは確認は出来ない。

法元寺裏山の石像群について

法元寺の裏（鉄道をこえて）より大神宮へ登る道がある。その登り口付近に山道に沿って、岩をくりぬいた所に1体ずつ、計30体の石像物が祀ってある。その台座は大正時代に寄附者名を刻したのもあり、皿山時代と思われるものもある。



大絵本隊員 谷窯跡にて



粟島神社の北 移設された大神宮・稲荷社・山神、
そして写真右奥に天満宮がある

お遍路巡りの盛んな明治・大正・昭和初期のコースではなかったかと思う。
十六善神との関連については、この中に含まれているのではとも考えたが、確証はない。

粟島神社付近の社の移動について

古地図では、谷窯の上に大神宮・稲荷社・山神が祀られているが、現在この地は宅地となっていて社は存在しない。また白焼窯の横にあった天満宮もこの場所がない。参道の痕跡はあるが、当該地は現在墓地となっている。

その代わり、現在の粟島神社の上にこれらの社が祀ってあるのを確認した。おそらく宅地、墓地を作る際に合祀・移設したのではないだろうか。

勧請寺

古地図には、八幡社内に「勧請寺かんとせうじ」という寺が記されているが、現在この寺は存在しない。廃寺がいつ、どういった理由でなされたのかは不明である。

隊員の話では、「そういえば昔、鐘突き堂があった」と記憶している者もあり、それらしきものが写った写真も残っている。この鐘は第二次世界大戦の折、金属供出されたものと伝え聞いている。

【大絵本隊参加者】

蒲地豊（隊長）

北村都、田中直良、中尾修、森重子、石川敬子、蒲地透、田中フミ子、前田勝行、

岩尾熙、岩尾和子、岸川貞光

各隊の調査報告

〔白川・稗古場隊〕

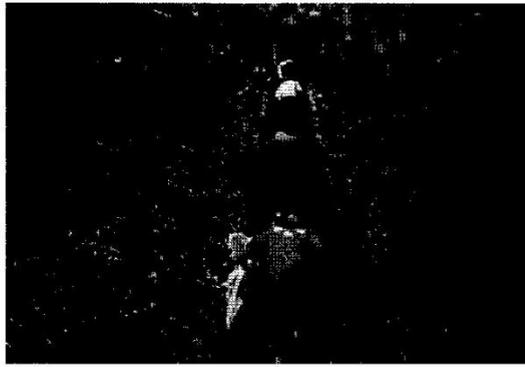
白川地区

有田焼の歴史の中でも、その開窯期と深い関わりを持つ白川と稗古場地区の踏査は、江戸時代の皿山代官所跡地からその第一歩を踏み出した。この跡地は現在では病院やその駐車場となっていて、その面影は跡地に残る陶板の説明書で知るのみである。

その駐車場横の小道を東方山手へ登って行き、古地図に『稻荷』とある所を目指した。その途中、新しい鳥居の奥に古い石造鳥居があり、それには「稻荷大明神」、年号は延享3年（一七四六）との記載がある。この鳥居と、現存している奥の社殿の記載は、当時の古地図にそのまま見ることができる。

そして、なかなか地元の人でもそれほど登る機会がないという、上方にある目的地の『稻荷』まで、急な階段を登って到達する。ここには、同じく延享3年当時のものと思われる石造の祠が2体祀られていて、なかなか大きく見事であるが、メ縄や供えられた花類から、現在も信仰されているのが分かった。

また、この周りは古地図には断崖として描かれているが、まさしく実際にそうなっていて、一五〇年前の地図の正確な描写に隊員みな感動した。



“若い”今だから登れた「稻荷大明神」



「こいかにゃ？(これかな?)」
「そいともこいかにゃ？(それともこれかな?)」

急な坂を注意しながら途中まで一旦下りて、南東の方角に現存する小道を山手の方へまた登っていく。そして、香蘭社の別荘等があった敷地へ着く。そこから、古地図にある『山神』という場所を確認しようとしたが、金網の柵の東山手に稲荷の赤い鳥居が見られたが、道が遮断された状態だったため、そこがこれにあたるのかは確認できなかった。古地図には、さらにその『山神』から東方へ山を登った所に、『蛇塔』と記された小さな石塔や『ワレ岩』と記された所があるが、残念ながらそこへの道は不明であり、断念せざるを得なかった。わが隊員の話では、この辺は不思議と蛇がたくさんいるという事であったが、名前の謂れと無縁ではないのかもしれない。その香蘭社の別荘跡の敷地から下り、現存し保存されている「下白川窯」へ出る。この窯は古地図にも明確に描かれていて、管理小屋と思しき4軒の建物の記載もあるが、それらは現存しない。

次に確認を目指したのは、「下白川窯」の南下方に描かれていた『祇園』の所在である。踏査したが、その位置に古い石垣の痕があるのを確認したが、残念ながらそれらがその痕跡だとの決め手となるものは発見できなかった。古地図ではある程度の大きさで描かれていて、当時においては一定の信仰を集めていた可能性が考えられる。『祇園』社についての由来などが今後分かってくれば、新たな発見につながる可能性もあるかもしれない。

『祇園』の南隣に記載がある「稲荷」は、エノキの古木の根元にある祠を2体確認した。一つには文化3年(一八〇六)、もう一つには天保15年(一八四四)甲辰年の銘があった。

白川地区から札の辻に向う本通りには「下歳橋」と呼ばれている橋が架かっており、当時の名前は定かではないが、古地図にもその橋を見る事ができる。現在の橋は大正9年に還暦祝いとして蒲地駒作氏によって寄贈され、昭和37年にコンクリート橋として架け換えたものである



国史跡 天狗谷古窯跡（昭和55年指定）

が、注目すべきは、そこから見える現在の川の流れや川岸の石垣が、古地図の当時とほとんど変わらないと考えられることだった。

また、白川の湧水の地という所に、水神様の祠があったが、天保15年甲辰年と記載された碑があった。代官所跡の北方向、天狗谷地区の当時唐臼があった場所には、現在復元された唐臼が野外展示されている。古地図には代官所からそこに至るまで川沿いに道が通っているが、現在は確認できない。

今回の踏査で特に興味深かったのは、白川地区の天狗谷古窯である。この窯は現在、陶祖李参平と深い関わりを持つ磁器焼成窯として重要な窯であるが、古地図には地名として『天狗谷』と記載されているのみである。この古窯の発見が昭和40年以降のことであり、江戸時代の安政期には地中深く眠っていたことになるので、窯名がないのは当然と言えば当然ではあるが、意外性があり面白く感じたものだった。なお、この天狗谷古窯は昭和40年より本格的な発掘調査が行われ、日本で初めて磁器のみが焼成された窯であることが確認され、昭和55年に国史跡に指定を受け、現在史跡公園として整備されている。

ところで、天狗谷という地名の由来であるが、○●犬狗と関わりがあるのかどうか、今の所定かではない。

天狗谷から北進すると、右手の方角に、古地図にある「天神」を確認できた。現在ここには「一番川天満宮」という比較的新しい鳥居が建っていて、天明2年（一七八二）寅の祠が建っているが、年代の銘などは見当たらず古地図にはない。「為朝橋」のように、この辺には「黒髪山の太蛇退治」伝説に因む名前が幾つか残されているというのである。

さらに北の方角には、祠らしき絵が小さく描かれている箇所が古地図にあるが、調べてみる



イザ、有田小学校へ!!

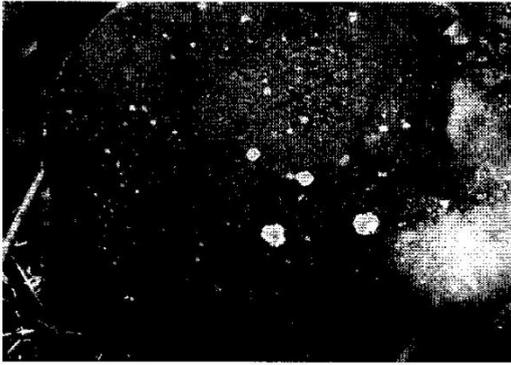
と確かにその位置に山神社の祠が現在も残っていた。よくこんな小さなものまで丁寧調べて地図に落とし込んだものだ、隊員みな大いに驚き、この古地図の正確さ、丁寧さに改めて感心したものだ。

白川橋の西側の辺りから、現在の有田小学校まで北に続く道は、古地図にも記載が見えるが、当時は道の周辺にはまったく人家はなく、道の東側にはかなり大きな墓地が記載されている。そういえば、稗古場に住んでいる今回の隊員が子供のころに、この辺りの土地から甕棺がよく出ていたと聞いたことを思い出していたが、そういう理由によるものかと考えられる。その当時の墓地は、現在白川の墓地に全面的に移転されているが、それは明治5年の有田小学校開校との関連も推測される。

この辺りの古地図に関連したものが残っていないかどうか、それを確認するため有田小学校を訪問し、土井教頭先生から資料室を見せていただいたが、直接関連したものは特には見いだせなかった。その後、小学校の裏手を確認したところ、山手側に古い石垣を確認したが、それは明治初めのころのものと思われた。小学校北側のプールがある場所では、プール沿いに古地図にある東西の小道と水路を確認した。今では通る人もいなくなったが、昔はこの道を通って有田町丸尾地区と往来があったといわれている。

ところで、我が隊員の話では、このプールは自分の小学校時代ではなく、泳ぐ時にはクラブトイル会社から小学校の下川、あるいは今池橋近くの川で泳いでいて、特にクラブトイル下や酒屋さん横の川では、洗濯をしたり食器なども洗っていたということであった。

また、同じころ石炭を積んだ馬車をよく見かけたが、当時は今と違って石炭を使って窯を焼いていたことを覚えていて、現在香蘭社がある所には馬小屋もあったということである。石炭



嘉永元年（一八四八）銘の石碑



稗古場の“天神さん”を下る

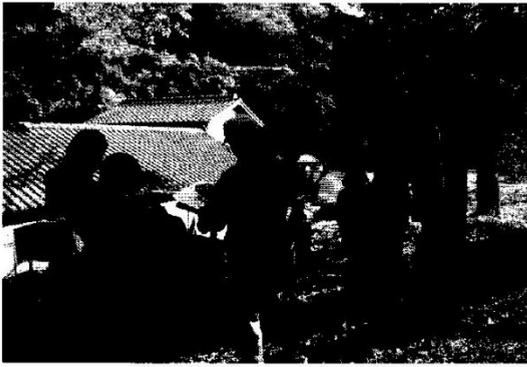
の燃え残ったものは「ガラ」と呼び、拾いに行つて自宅の風呂の燃料とか、七輪で使つたりして生活していたということである。

稗古場地区

白川橋から稗古場地区へ渡つて踏査する。現在、白川橋が架かっている所は、古地図では飛び石の記載となつていて橋はない。その南も同じく橋はなく、飛び石が描かれている。白川橋を渡つた後、稗古場地区では、その一部が香蘭社の敷地内となつていた。香蘭社の元従業員であつた隊員により、会社の許可を得て敷地内の説明を受けながら道の確認等を行つた。赤絵町から北の稗古場地区へ川を渡る橋は、東側では天神橋以外には古地図には描かれていないが、香蘭社敷地内では便宜上、橋が設けてあつた。その橋を通つて北へ向うと敷地内に小路があり、それは北方角へ向つていて、敷地外の古地図にある道へとつながっているようだった。ただ、古地図にある一部の道は敷地の中に吸収され、不明な箇所もあつた。

天神橋の北の位置から西の方角、天満宮まで続く道は三か所に分かれている。北側の道は天満宮のすぐ下を通り、南側の道は有田川沿いの道であり、その間にまた道がある。地元の人それぞれ北から順に、上道（ウワミチ）、中道（ナカミチ）、下道（シタミチ）と呼んでおられ、この辺りは職人さんが多かつたため、天神橋を別名職人橋とも呼んでいたとの話も伺つた。古地図では中道の南隣に祠が、つ描かれているが、個人宅に組み込まれていく過程においてか、現在は不明となつていた。

稗古場の天満宮すなわち天神さんは、古地図にもはっきり描かれている。現在、境内入口に天満宮という石の鳥居があるが、古地図では奥の石段手前に描かれている。急な石段を登つた



百婆仙との関わりがある稗古場古窯跡

上には、特に社殿などはなく石碑が幾つかあり、右手にある丸い石碑には「嘉永元年（一八四八）申十月吉日」と記されていた。古地図が描かれる11年前である。石段下の境内の西には、古地図で毘沙門と記された祠が描かれているが、これは現在も残っていて、その中に当時もあつたと思われる毘沙門天が安置されていた。

天満宮を西方向に過ぎ、同じく有田焼開窯期の代表的な窯、稗古場窯跡へ着く。百婆仙一族が築窯したといわれる窯跡を確認した。古地図にある窯跡の下方部は、現在人家の敷地となっている。また、李參平も関わっていたといわれる天神山窯跡を確認したが、遺構、窯体は不明となっている。

しらかわ保育園の南斜面から観音山へ登る。朝鮮人陶工たちが登っては故郷を偲んだという山である。多くの石仏や石塔の他に、江戸時代の早い時期、金ヶ江・深海の名を刻んだ祠（祭礼廟）などは、古地図ではすでに山神として記載され、崇拜の対象とされていたことが伺える。観音山を報恩寺側へ下る時に赤い鳥居があつたが、こちらは個人崇拜の対象と思われた。そこでは、おこわを供える習慣があるとも聞く。なお、古地図には、報恩寺の敷地内に鳥居が描かれているが、おそらくこれにあたるのではないかと思われた。

報恩寺では、裏の山中に入り、古地図にある水路と小道を確認した。また、古地図にある、離れて建つ稲荷社へ出向きその場所を確認した。なお、この報恩寺には、陶祖李參平のもう一つの墓碑、百婆仙の法塔などがあり、開窯期との深い縁が偲ばれる。

「日恵古場橋」から天神橋にかけて、川辺に近い「下道」を行く。古地図では北の方向に小道が3か所ほど描かれているが、人家となった現在では不明なものもある。また、川沿いには古地図に記載がある川の石垣らしきものも確認でき、それは当時のままと考えられた。また、



観音山の祭礼廟
金ヶ江・深海の名が刻まれている



ケーブルテレビの取材も（観音山）
調査風景は佐賀県内に放映された

川辺に石で囲まれた箇所があって、ここは今でも洗い場として利用されているというが、古地図にもその場所が小さくではあるが、確かにキチンと描かれている。古地図の精密描写に、またまた隊員皆驚いたのは言うまでもない。

天神橋から東方面にかけ、川辺に沿った道が描かれているが、今はない。近所の人の話では、自分が子供のころまでその道は確かに残っていたという。さらに隊員の話によれば、昭和22年（23年、隊員が小学校2〜3年生のころ、この日恵占場橋から天神橋にかけての流域では、まだ、水車と唐臼が作動していて、陶石を粉碎していたのを今でもはっきり記憶に留めていた。

天神橋の北方角の所に、恵比寿の石像を見つけた。恵比寿像は白川でも目にしたが、商売繁盛を願ったと思われるこの像は、各地区に点在しているようである。

隊長のまとめ

精密に描かれた一五〇年前の古地図を手に、毎回皿山代官所跡地に集合し、隊員それぞれがそのつど新しい発見を目指してワクワクしながら、いにしえの皿山歩きを楽しみました。

全6回に亘る現地調査を済ませ、その結果を地図に落とし込み、着色して仕上げることができました。この新しい地図が有田を訪ねられる人々にとって、有田観光の道しるべとして利用されることを切望しています。

【白川・稗占場隊参加者】

大串忠弘（隊長）

天間良子、田中祐喜子、山口信行、山下文子、江頭正恵、西田功

各隊の調査報告

〈中の原・岩谷川内隊〉



踏査中の隊員（八阪神社参道）



プランターとしてご奉公する、失敗作の火鉢（八阪神社の西）

古地図で歩くころ

わたしはこちずでいろいろ考えました。「えど時代に、タイムスリップしたいな」と思っています。えど時代はわたしのひいひいばあちゃんの時代なのか。学校はあったのだろうかと考えます。わたしがタイムスリップしたら、おしろに住みたいのです。坂本りょうまの友達になって、黒ふねにのりたいです。外から日本をみたいのです。

わたしが一番楽しかった所は、山です。山に神社があったり、毎回毎回、おもしろい所が見つかります。なので、わたしは歩こうたいに入ってよかったなと思いました。

古川ちるな（小4）

古地図で歩こう隊に参加し、私はたくさんのお話を学び、いろんなことを感じました。

今の地図を持って、一五〇年前の地図をもとに、道・川・橋を探していく、この行動をずっと続けています。とても単調な事のようにですが、とてもおもしろい発見や、たくさんのお話の知恵などが数多く見つけれられました。

同じ班の方々と話しながら、ずっと歩いていき、とてもおもしろく、ためになりました。有



「ここがこがんなってっけん、こいがここやろう(ここがこのようになっているから、これはこうでしょう)」「フムフム」



有田川の中で調査する隊員(岩中橋の付近)

田に住んでいるのに、全然知らなかった有田のこと。この事業に参加して、分かったたくさん有田のすてきな所を、子供に、孫に、ずっと先の未来に伝えていきたいと思いました。

古川慧月(中2)

一五〇年前の皿山は歩こう隊に参加して

色々な道を歩いてみて、昔は人が歩いた所も今は通れなくなりしているが、子供さん達は元気よく走り廻って歩いている。山崩れ、水害が来て道が流されている。国道、馬車道だった道も申の時代になり広くなり、家屋の建物も道路に切り取られている。古い商家の家もあり、又、道路もアスファルトの道に変わった時には、商家は玄関口が地下になっている、大変な時代です。

今泉元夫

もつとたくさん歩きたかった。

金ヶ江ひとみ(小2)

知らない場所や気にもとめていなかった通りに歴史がある事を知りました。有田の先人の高い意識に感動しきりです。

金ヶ江美里

むかしの地図と今の場所と合わせていくのがたのしかったです。ずっとおくにいくと大人よりでかいプールがありました。そのあと、かえるとき、坂道をおりてあそんだことがとってもたのしかったです。

中村玲菜(小3)

一回しか行けなかったけど、とっても楽しかったです。有田にこんな所があるんだなあと思



猿川窯跡奥の山の神さんです
(左:境内にある石灯笼 右:鳥居)

猿川窯跡は山の中でした(岩谷川内三丁目付近)

いながらあるいていました。

ずっとずっとおくへ行っていたらプールがありました。そのプールはすごくおおきくて深かったです。いくら背が高くてもおぼれるくらい深かったプールを覚えていきます。

歩こう隊に行つて見たら有田の知らない所などわかんと思うので、もつと歩こう隊に行つて、もつと私が知らない有田を見つけないです。

中村真菜(小5)

歩こう隊に参加させてもらつて有田町を少しだけ知ることが出来て、もつと知りたいと思いましたが、役に立ちたいと思いました。町の保存はとても難しいことも痛感しました。

中村優水子

【中原・岩谷川内隊参加者】

今村安伊子(隊長)

野田登志、中島忠、古川智博、古川朋子、古川夏月、古川慧月、古川ちるな、

今泉元夫、金ヶ江美里、金ヶ江ひとみ、中村優水子、中村玲菜、山村真菜

花王コミュニティミュージアム・プログラム2009助成事業
一五〇年前の有田皿山は歩こう隊覚書 其ノ志

題 字 蒲 地 豊

編集・発行 「一五〇年前の有田皿山は歩こう隊」隊員

特定非営利活動法人アリタ・ガイド・クラブ

有田町歴史民俗資料館

発行日 2010年9月1日

印刷 山口印刷株式会社



有田史談会

佐賀県西松浦郡有田町1-8-5

特定非営利法人アリタ・ガイド・クラブは
2013年に解散し、有田史談会として
活動を続けています。



<https://arita-sidankai.sub.jp/>